結して毒きほしいままにす。出羽国の軍、これと相戦い敗れ退くと。ここに於て近江介従五位上佐伯宿祢久良麻呂を以て鎮守府権副将軍となし、出羽国を鎮めしむ。是に至って正五位下勲五等紀朝臣広純に従四位下勲四等を、従五位上勲七等佐伯宿祢久良麻呂に正五位下勲五等を授く。」

とある。

宝亀九年（七七八）二月、久良麻呂は春宮亮（とうぐうのすけ）になり、ついで天応元年（七八一）正月、正五位上に叙し、同年四月十五日恒武天皇が即位すると、従四位下に昇叙、五月には中衛中将となった。

延暦元年（七八二）二月、中衛中将のまま丹波守を兼任、同年六月、衛門督兼丹波守となり、延暦三年（七八四）五月十六日には長岡京遷都の地を決めるため、中納言藤原小黒麻呂・三位藤原種継・左大弁佐伯今毛人・参議紀船守・参議大中臣子老・右衛士督坂上苅田麻呂らとともに、山背（山城）国乙訓郡長岡村に行き、地を相した。そして延暦五年（七八六）正月、従四位上左京大夫に昇任した。

以上見てきたように佐伯宿祢久良麻呂は、どこまでも朝廷の良き官吏であり、またしばしば殊勲をたてた武将でもあった。

彼と佐伯の土地との関連は、国史の上ではわからないが、久良麻呂二十年の経歴からいえることは、彼が地方官として豊後の僻地に子孫を残すような人物でないということ、従って海部公常山と結びつけた豊日志の説は、まったくの臆測といわなければならない。

（筆者住所＝佐伯市下堅田、津志河内）

評伝

桃花塾岩崎佐一先生（二）

その人と為りと事業について

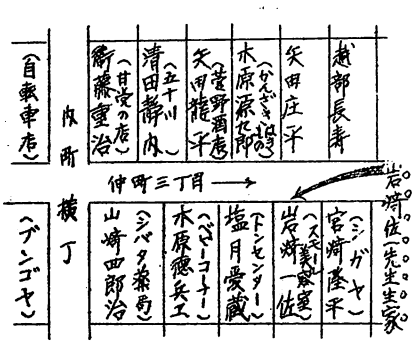
会員　羽柴　弘

岩崎佐一先生は明治九年（一八七六）八月十八日、今の佐伯市仲町三丁目で生まれた。今手許にある明治四年頃の「佐伯藩時代屋敷図」を見ると、次のようになっている。

この仲町三丁目は、古市町・中島町と共に屋敷割がせまい。家中（後の士族）ではあるが足軽の身分、いわゆる足軽六組に属する、家中としては軽輩である。角の山崎四郎治が組頭になるわけで、今「シバタ薬局」の家に当るので、先生の生まれた岩崎家は、角から四軒目になり、今は「スモモ北」と名乗る美容院になっている。

父は岩崎一佐（元佐伯藩士）、母はトリと呼び、先生はその第六子として生まれた。

これより先、佐伯藩では明治二年、藩主毛利高謙は版籍を朝廷に奉還、藩士は士族となり、今まで藩から支給されていた俸禄からはなれることになった。多少の金録公債の支給はあったであろうが、先生が「第六子」として生まれ



られたことを合わせ考えて、失礼ながら岩滑家としては、家計必ずしも豊かならざるものがあったのではあるまいか。やがて百年も前の市井のことで、その辺のことをいま急にしらべる手がかりはない。

年譜によれば、明治十五年九月、満六才になった幼童佐一は佐伯小学校に入学した。

当時佐伯には、明治七年開校した佐伯学校というのがあり、官に接収されていた三の丸の旧御殿がその校舎に使われていた。畳の敷きつめられた大広間がその教室、教室といっても黒板一つなかった、草わけ時代の、寺小屋か塾とたいして変らない程度のものではなかったか。教科も読み、書き、そろばんぐらい、教則とて大ざっぱなものであったろう。しかしともかくそこでどんな風に学び、少年佐一がどのような成績の学童であったか、たずねる人とて今はない。

明治二十一年三月、同校小学課程を卒業　と年譜にあるので、佐一少年は五年半在学していたことになる。当時は尋常小学校は四年制、それを卒業したら三の丸下にあった高等小学校に進学していた。それで少しおかしいところがあるが、年譜の次を見ると、明治二十三年四月（高等三年の時）旧藩主毛利家の経営になる、鶴谷学館に入学、夜学で漢学・英語・数学を学ばれている。このことは憶えておきたい。

このころ、当時佐伯ではどのようなことがあり、少年佐一はどんな見聞をしていたか。

まず明治十年の西南戦争、佐伯村にも薩軍が侵入し、要所々々を占領し、佐伯救援にやって来た政府軍と交戦し、砲弾が市中に飛来して戦々恐々たるものがあった。しかしそれは明治九年生まれの先生には、わからなかったであろうが、生長するにつれて西南戦争、即ち内戦のすさまじさや、恐怖や、悲惨さが追々理解されたことであろう。

池船橋がかけられたり、葛港が刺築されたり、明治二十二年には船頭町の大火を目のあたりに見たであろうし、町村制実施で佐伯村が佐伯町となったのもこの年である。

佐一少年は、高等小学校在学のまま、鶴谷学館の夜学に通い、飽くことのない知識慾にもえていたことであろうが、これらを裏付ける資料は今ない。

明治二十五年三月、佐一は高等小学校（四年制）を卒業した。満十六才と七ヶ月、多感な青年前期にはいっていた。

翌二十六年七月、十七才の佐一は推薦されて、東上浦津井尋常小学校の雇教師に就任している。言うなればそれは無資格の代用教員であったであろうし、補助教員としての就職であったろうが、この社会第一歩を小学校の教育に踏みこんだことは、きわめて意義あることであった。

ちょうどその二十六年九月、鶴谷学館の教師として国木田独歩が佐伯にやって来た。独歩が佐伯に来たということは、独歩自身の文学にとっても意義のあることであったが、佐伯にとってもいろいろな点で、今も独歩はその文学をもって、佐伯市民にいろいろと与えてくれている。そして青年教師岩滑佐一にとっても、独歩との出会いが、生涯の一転機となったのであるから、人生はまことに不可思議である。

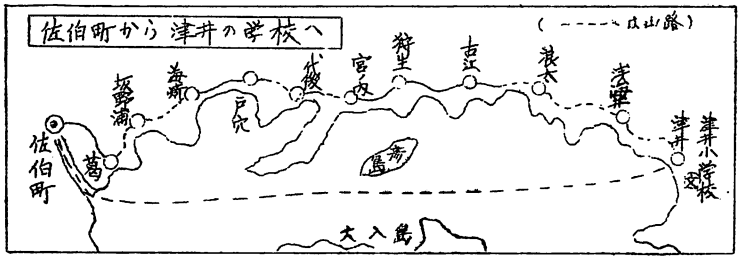
それを言う前に、津井小学校での岩滑先生の生活を、少しばかり考えて見たい。

津井尋常小学校は、今の上浦町の津井、部落の東北部国道二一七号線が蒲戸へ通ずる道路からの分岐点に近い

ところにあったと聞いている。十七才の青年教師、今とかがつて佐伯から通勤というわけにはいかなかつた。鉄道日豊線など勿論なかつたし、第一佐伯―八幡―西上浦―東上浦とつなぐ海岸道路とてまだ無く、「滝ノ上七坂」という言葉がある位、海岸を歩いてせまいいも畑の小路を通つて、胸を突くような坂道を上り、小さな山を越しては谷に下る。そんなこと、上つたり下つたりの細道を三里も四里も歩かなくては、津井には行けなかつた。恐らく浅海井から津井への道も、当時は海岸は全く通れず、海岸から数十米高い山の中を通つていたはずである。（当時は隣りの部落に行くのも、佐伯の町に出るのも、すべて手押しの舟であつたから、陸上を徒歩でなどあまり行なわれなかつた。）

岩滑先生は赴任して多分自炊したことであろう。薄給でもあつただろうし、第一当時は下宿などいう気のきいた宿はなかつたであろう。あまり推測が多いようで気がひけるが、もう少しつづけることを許してもらいたい。

教員としていくら給料がもらえたか。恐らく月に五円？いやもつと少なかつたかも知れない。初めての給料を手にした岩滑先生は、土曜日の午後足も overleaf したまらず、四里ほどの道のりを遠しとせず、幾つもの山坂を上り下りしながら佐伯仲町のお宅に帰られたにちがいない。一晩うちで寝て、また歩いて津井の学校への道を辿られたであろう。何度かこうしたことを繰りかえした後、日曜日の朝早く、佐伯町行きの船便を利用して広小路付近に着き、午後はまた船の帰り便に乗せてもらつて――と、そんなことではなかつたか。



たまたまこの頃、岩滑佐一があるいはまだ籍さおいていたであろう鶴谷学館に、国木田独歩が来任した。そして二十三才の独歩と、十七才の佐一先生が対談する機会がまもなく与えられたはずである。

岩滑佐一は高等小学校三年生のときから、鶴谷学館に入学して二年間ほど勉強している。教科は漢学と英語と数学、小学校が終つて夕方から鶴谷学館の授業がはじまり、日の短かい冬になると夜学となつていた。

若くて気位いも高く、新知識を一杯いもつた英語教師、佐伯の自然にほれこんでいた文学青年独歩と、津井学校の十七才の補助教員岩滑佐一は、初対面以来急速にその交際は進んだことと思うが、何より岩滑先生の方が独歩に対してグングン引つ張られて行つたにちがいない。ちょうどかわききつていた咽喉が水を求めるように。

昭和三十七年十一月、岩滑先生の葬儀に際し、会葬者にくばられた故人の略歴の中には、簡単ではあるが次のように記されている。

明治二十六年七月
大分県南海部郡東上浦津井尋常小学校（注）庭教師に就任し、この年七月、国木田独歩氏、佐伯鶴谷学館に赴任し、藩の子弟を教育する。（注）独歩の佐伯に来たのは九月であつた）
独歩、佐伯在任期間僅かに一年間であつたが、指導を受け大いに感化をうける。

（以下次号）